

東京湾 No.2 第二海堡

No.2 SEA FORT OF TOKYO BAY



詳しい情報はこちら
Scan here for details



ペールに包まれた東京湾要塞の歴史とその背景

かいほう 海堡の意味

海堡は、海中を埋め立てて人工の島を造り
その上に砲台を築いた防衛施設のことです。
江戸時代以前は、陸上、海上を問わず
「台場」と呼ばれていました。



海防をめぐる歴史

海防強化への目覚め

18世紀半ば、イギリスで始まった産業革命は、欧米諸国に波及し、その勢力はアジア・アフリカ・中南米に拡大していました。天明6年(1786)に著された林子平の『海国兵談』では、江戸湾海防の必要性が説かれていましたが、そんな中で鎖国日本の扉を初めて叩いたのは帝政ロシア使節ラックスマンの来航でした。

また、天保10年(1839)、江川太郎左衛門英龍は、江戸湾巡見の復命書で富津岬の海中への台場建設を幕府に提案し、渡辺華山はそれを基に「江戸湾海防計画図」を作成しています。

天保11年(1840)、アヘン戦争による清国の敗北が幕府に大きな衝撃を与えるとともに、外国船による事件なども頻発していたため、幕府は海防強化の重要性に目覚めます。そして開国は必然の状況下、嘉永6年(1853)、米国のペリー艦隊の浦賀来航を迎えることになりました。

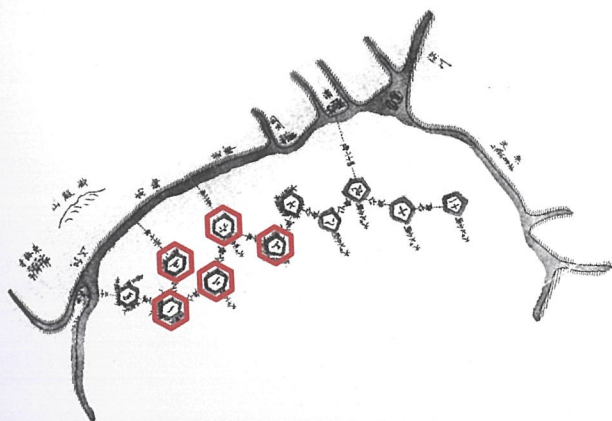


図1：品川台場配置図
嘉永6年(1853)7月(推定)

[資料]「東京湾第三海堡建設史」図-1.3.3より転載

江戸湾最初の人工島「品川台場」

ペリー来航後、幕府から再び江戸湾海防を命じられた江川太郎左衛門英龍は、観音崎～富津岬の防護線とともに江戸の最後の護りとして品川台場の建設を提案しました。これに基づき、江戸湾最初の人工島が築かれることとなったのです。

また、品川台場の提案は、維新後、明治新政府に引き継がれ、江戸湾沿岸への砲台建設による防備の強化や、その後の海堡の建設へと進み、「東京湾要塞」の基礎が形づくられることとなります。



図2：ペリー来航後の江戸湾の台場
嘉永7年(1854)

[資料]「東京湾第三海堡建設史」図-1.1.2より作成

3つの海堡の必要性

東京湾防御体制の整備に中心的役割を果たした陸軍少佐の黒田久孝は、明治8年(1875)、連名で「全国防禦法案」を出しました。以後、この案が東京湾要塞建設の基本になったといわれています。第一海堡の完成間近となった頃、当時の大砲の有効射程距離が約3.0kmだったことから、陸軍は、防御をより強固にして敵艦の進入を阻止するために、富津と観音崎の間に2つの海堡を増設することにしました。

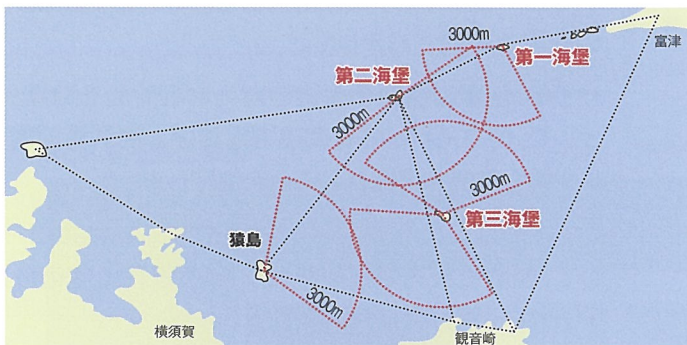


図3：東京湾海堡関係図

[資料]「東京湾第三海堡建設史」口絵 3.10 より作成

変化する防御ライン

東京湾には、明治13年(1880)、観音崎砲台着工に始まり、24の砲台が建設されました。海堡は、当時の重要な防御ラインである横須賀～富津を結ぶ湾口部に位置していました。しかし、大砲の性能が向上し射程距離が伸びたことで、重要な防御ラインは三浦半島の先端部～房総半島南部に南下しました。大正3年(1914)、第二海堡は竣工しますが、実戦でその能力を発揮することはありませんでした。

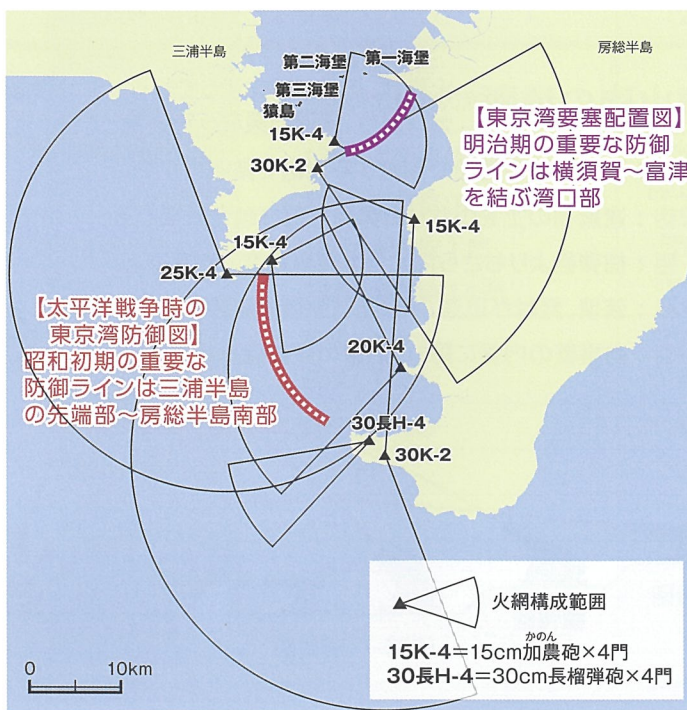


図4：太平洋戦争時の東京湾防御図

[資料]「東京湾第三海堡建設史」図-3.1.2 等より作成

第二海堡に関する歴史的要変年表

時代	和暦	西暦	海防をめぐる主な出来事
江戸	寛永16	1639	第五次鎖国令で鎖国体制がほぼ完成
	天明6	1786	林子平「海国兵団」で海防の必要性を説く
	寛政4	1792	ロシア使節ラックスマン来航
	文化1	1804	ロシア使節レザノフ来航
	文化5	1808	イギリス軍艦フェートン号事件
	文化8	1811	ロシア軍艦コロニン号事件
	文政8	1825	異国船打払令の発令
	天保8	1837	アメリカ船モリソン号事件
	天保10	1839	江川太郎左衛門英龍、台場建設を提案
	天保11	1840	中国でアヘン戦争、清国が敗北
	天保13	1842	薪水給与令の発令
	嘉永6	1853	アメリカ東インド艦隊司令官ペリー来航
	嘉永6	1853	ロシア使節ブチャーチン来航
	嘉永6	1853	江戸幕府、品川台場着工
	安政5	1858	日米修好通商条約を締結
	慶応3	1867	大政奉還、王政復古の発令
明治	明治4	1871	山縣有朋「軍備意見書」提出
	明治5	1872	陸軍省・海軍省設置
	明治6	1873	マルクリー「海岸防禦法案」を提出
	明治8	1875	黒田久孝、連名で「全国防禦法案」を提出
	明治8	1875	レミュエー、連名で「日本国南部海岸防禦法案」を提出
	明治13	1880	観音崎第一砲台、第二砲台着工
	明治14	1881	第一海堡着工
	明治20	1887	第一海堡の人工島竣工
	明治22	1889	第二海堡着工
	明治23	1890	参謀本部「海岸防禦計画大綱」を作成
	明治23	1890	第一海堡の上部構造物竣工
	明治25	1892	第三海堡着工
	明治27	1894	日清戦争勃発
	明治32	1899	第二海堡の人工島竣工
	明治32	1899	「要塞地帯法」と「軍機保護法」が公布・施工
	明治33	1900	第二海堡の上部構造物着工
明治37	1904	日露戦争勃発	
明治39	1906	日本陸軍、米国陸軍に対して、東京湾海堡築造に関する情報を提供	
明治40	1907	第三海堡の人工島竣工	
大正	大正3	1914	第二海堡の上部構造物竣工
	大正3	1914	第一次世界大戦勃発
	大正10	1921	第三海堡の上部構造物竣工
	大正12	1923	関東大震災
昭和	昭和6	1931	満州事変勃発
	昭和6	1931	海軍、第二海堡の無償使用申し入れ
	昭和16	1941	太平洋戦争勃発
	昭和20	1945	終戦、東京湾要塞米軍に接收
	昭和30	1955	第二海堡、米軍から日本へ返還

明治新政府による海堡建設

わが国の伝統技術と西欧の最先端技術の融合

やまがたありとも

山縣有朋による日本列島要塞化

明治から大正にかけて陸軍元帥として陸軍に君臨した山縣有朋は、明治4年(1871)、『軍備意見書』を提出し、日本列島の要塞化を主張しました。そしてこれを実現するため、山縣は明治6年(1873)、フランスの陸軍中佐マルクリーに東京湾を視察させ、『海岸防禦法案』を提出させます。

続いて明治8年(1875)には、フランスの陸軍中佐ムーニエー、工兵大尉ジュールダン、砲兵大尉ルボンに『日本国南部海岸防禦法案』を提出させますが、これらの提案は、いずれも海岸や島に砲台を築くというものでした。

近代要塞建設の先駆け

東京湾要塞は、首都東京および横須賀軍港を防御するために東京湾口部に建設された砲台群です。この建設は、明治13年(1880)、観音崎第二砲台着工に始まり、続いて、観音崎第一砲台に着工。そして翌年の明治14年(1881)に最初の第一海堡の建設が開始されました。

さらに、陸軍は当時の大砲の有効射程距離を前提として、約2.6kmの等間隔で富津岬と観音崎の間に2つの海堡を増設することを決定しました。

これらの砲台や海堡は、日本の伝統技術を基盤として、西欧の最先端技術を取り入れ、近代要塞砲台建設の先駆けとなりました。

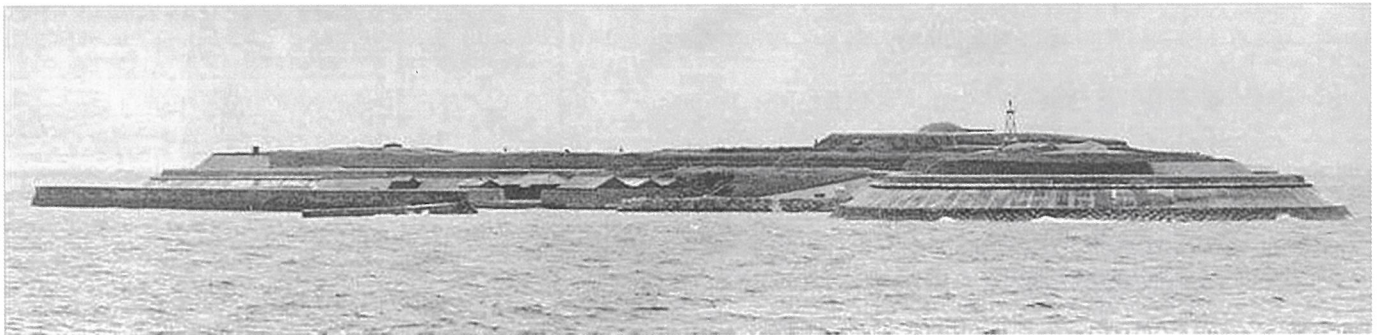


写真1：明治40年(1907)に撮影された第二海堡

[資料] 米国立公文書館(NARA)所蔵

火砲の性能で変わる戦略

明治13年(1880)以降、本格的に要塞の建設に着手した陸軍は、火砲をできるだけ国産品により整備することを計画しましたが、当時の製造施設の不備と造兵技術の未熟さのため、早期の国産化はできず、加農砲は、外国製品に依存するほかはありませんでした。

また、軍艦の性能が飛躍的に向上した第一次世界大戦後にあっては、旧式の火砲が無用の長物と化すなど、東京湾要塞は明治・大正・昭和へと時代が移るなかで、変化する戦略と進化する技術への対応を迫られ、その姿を大きく変えざるを得ませんでした。

要塞火砲の種類

火砲は、その用途によっていくつかの種類に分けられ、弾道も異なっている。

- **加農砲** (かのんほう)：弾丸を高い初速で発射する火砲で貫徹力が高い。
- **榴弾砲** (りゅうだんほう)：遮蔽物の上を山なりの弾道で飛び越え射撃する。
- **臼砲** (きゅうほう)：榴弾砲よりもさらに大きな発射角度で射撃する。
- **速射砲** (そくしゃほう)：装填、発射が迅速、より低い弾道で発射する。
- **隠頭砲** (いんけんほう)：防護壁の内側に隠れ、射撃の際に砲身が持ち上がる。

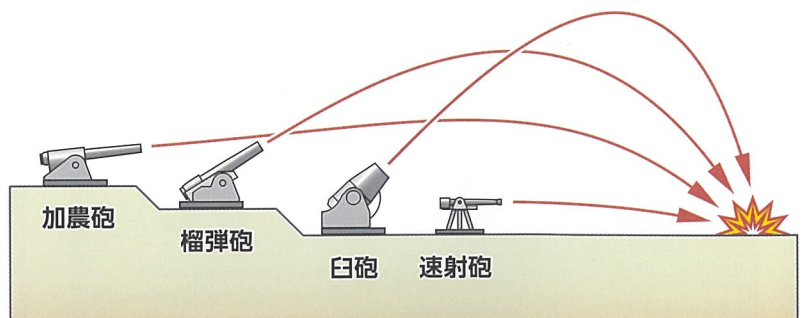


図5：要塞火砲の種類 [資料] 東京湾第三海堡建設史 図-7.2.1 より作成

東京湾要塞(3つの海堡)の建設

着工 ▶ 明治14年(1881)、富津岬の先端の海中において、富津海堡(後に第一海堡)に着工。9年の歳月をかけて明治23年(1890)に竣工した。明治22年(1889)に第二海堡に着工。そして、第二海堡着工の3年後の明治25年(1892)に第三海堡に着工します。

面積 ▶ 3つの海堡のそれぞれの満潮面での面積は、第一海堡が23,000㎡、第二海堡がその1.8倍の41,000㎡、第三海堡は第一海堡と同程度の26,000㎡でした。

水深 ▶ 海堡建設の難易を決めるもっとも大きな要素となっているのが水深です。第一海堡地点の水深は1.2m~4.6m、第二海堡は8m~12m、第三海堡は39mもありました。水深が深いほど施工の難易度は高くなり、さらに潮流が早い地点であることが工事を難しくしました。

東京湾海堡比較表

項目	第一海堡	第二海堡	第三海堡
			
人工島			
▶ 着工年月	明治 14 年(1881) 8 月	明治 22 年(1889) 7 月	明治 25 年(1892) 8 月
▶ 竣工年月	明治 20 年(1887) 6 月	明治 32 年(1899) 6 月	明治 40 年(1907) 10 月
上部構造			
▶ 着工年月	不明	明治 33 年(1900) 3 月 16 日	大正 3 年(1914) 9 月以降
▶ 竣工年月	明治 23 年(1890) 12 月	大正 3 年(1914) 6 月	大正 10 年(1921) 3 月
建設期間	9 年	25 年	29 年
建設地	千葉県富津市 富津岬の先端の海中	千葉県富津市 第一海堡の西方 2,577m	神奈川県横須賀市 第二海堡の南方 611m 走水低砲台の北方 2,589m
備砲(建設当初) [注1]	12cm 加農砲(隠頭砲架) 2 門 12cm 加農砲(攻城砲架) 2 門 19cm 加農砲 1 門 28cm 榴弾砲 14 門	27cm 加農砲(砲塔) 2 門 27cm 加農砲(隠頭) 4 門 15cm 加農砲(砲塔) 8 門	10cm 加農砲 8 門 15cm 加農砲 4 門
海底の深さ	最深 4.6m 最浅 1.2m	最深 12m 最浅 8m	最深 39m
海底の地質	貝殻混合の砂	貝殻混合の砂	砂利交り砂
潮流の速度(毎秒)	1m/秒	1.2m/秒	1.5m/秒
満干の差	2m	2.2m	2.2m
基礎上部面積	23,000 ㎡	41,000 ㎡	26,000 ㎡
工事費用 [注2]	378,322 円 (現在の金額) 約 17.5 億円	791,647 円 (現在の金額) 約 36.7 億円	2,493,697 円 (現在の金額) 約 115.7 億円

[注1] 備砲は、軍事外交的背景や兵器の進歩、戦略の変化などの影響により大きく変遷しているが、ここでは建設当初に配備された各海堡の備砲を列記した。

[注2] 第一海堡から第三海堡の現在の金額は、第一海堡建設着工年の時期の明治14年(1881)からの物価変動を考慮し、現在の金額に換算した工事費用。

第二海堡に現存する資源

SINCE1889

残存する要塞 第二海堡の遺構

第二海堡は、当時の面影を今に伝える遺構や開放的な景観など、貴重な資源を有しています。ただし、場所によって立ち入りできないところがあります。



えんべいごう
右翼北側の掩蔽壕の内部です。アーチ形の入口は地下通路で27cm加農砲に繋がり、天井はコンクリート、横壁は煉瓦構造物となっています。

煉瓦構造物
(右翼北側掩蔽壕)



北側海域の防波堤です。東側は160m、西側は延長80mですが、側部分は沈下が進み海没状態

防波堤



煉瓦構造物
(右翼西端掩蔽壕)



日清戦争時、海軍が右翼に水雷衛所や海軍砲を設置しましたが、日清戦争終結後これらは撤去されました。その後第二海堡の基礎工事は続行され、この西端に15cm加農砲が配備されました。

第二海堡からは桜花草煉瓦の他にいくつかの刻印が収集されています。



煉瓦刻印

砲台跡・灯台



かのんほう
15cm加農砲の砲台跡で、無筋コンクリートの巻き立てが行われています。現在、この場所に第二海堡灯台(高さ12m)が設置されています。

間知石



けんちいし
間知石が積まれた南側の護岸です。伝統的な築城技術によるもので、関東大震災でも崩壊しなかった堅固な構造となっています。



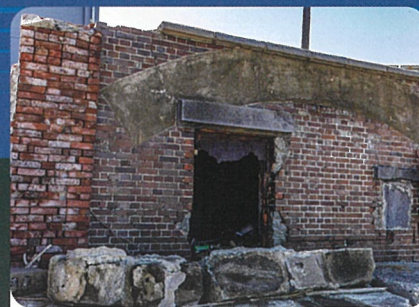
北側の繫船場です。係船柱が残存し、石垣の勾配も急なことから当時の繫船場であると考えられています。

繫船場



右翼北側の^{えんべいごう}掩蔽壕の外観です。イギリス積みの擁壁が114m続き、煉瓦は高温で焼いた耐水効果の高いものが使われています。

煉瓦構造物
(右翼北側掩蔽壕)



北側の着船場に隣接する倉庫です。壁は煉瓦、天井はコンクリート。繫船場に近い場所に位置し、防水施工もされており、燃料を保管した倉庫であると考えられています。

北側着船場前倉庫



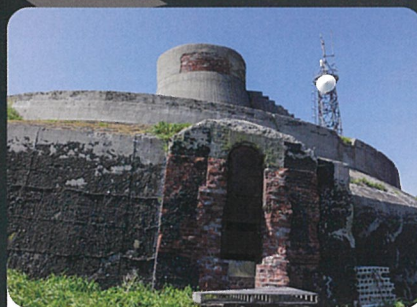
12.7cm高角砲の砲座跡です。この高角砲は太平洋戦争時、昭和19年(1944)に設置されたものだと考えられています。

高角砲の砲座



この観測台は視界の開けた場所に設けられており、地下の指令室や通信室と一体的に機能していたと考えられています。

中央部砲塔観測台



左翼側の地下要塞の入口です。

煉瓦構造物
(中央部砲塔地下部)



第二海堡付近を行き交う船



第二海堡は浦賀水道航路および中ノ瀬航路に近接しており、大型のコンテナ船やタンカー、豪華客船などを間近に見ることができます。

第二海堡建設の特筆される技術

アメリカに技術供与を求められた高度な建造技術

第三海堡建設にも採用された護岸工事

第二海堡は水深 8m ~ 12m の海中に築かれた人工島で、49 万 m³ の石材、30 万 m³ の砂が使用され 50 万人の人夫が使役されました。水深が深いため、第一海堡のように海底から石垣を築くことができず、まず、海底に割栗石を投入して海上まで積み上げ、その上に石を積み上げて堤体を形成しました。

割栗石の投入に当たっては目的の位置に投入できるよう、浮標を目的地の付近におき、積載船(五大力船またはダルマ船)を浮標に係留して割栗石を投入しています。材料は、主として付近の海岸から採取しましたが、護岸に使用した石材は真鶴産だという説が有力です。こうして、第二海堡は、台風による風や波で、工事途中で何度も破壊され、大変厳しい海象条件のなかで、着工から 25 年後の大正 3 年(1914)に完成しました。

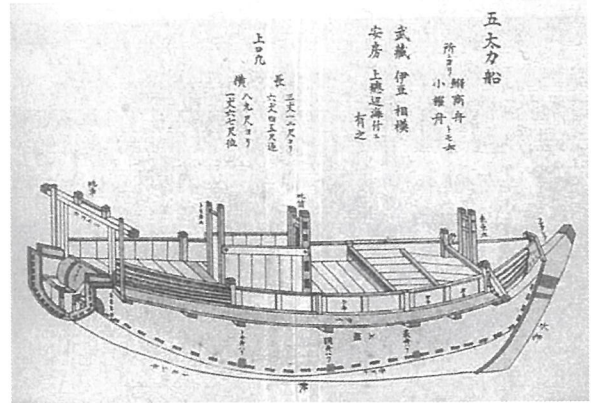
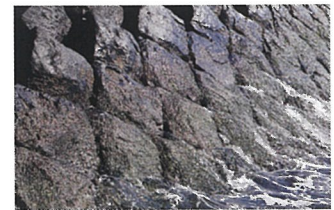
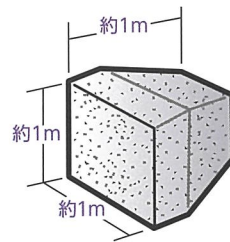


写真 2：五大力船

[資料]「東京湾第三海堡建設史」写真-5.6.2より転載



[注] 間知石 被覆に使用した間知石は安山岩であり、その性質は硬く密で、長く風雨にさらされても崩壊することはない。形状は長斜方形で、その面は約1mの正方形、控えは約1mであった。

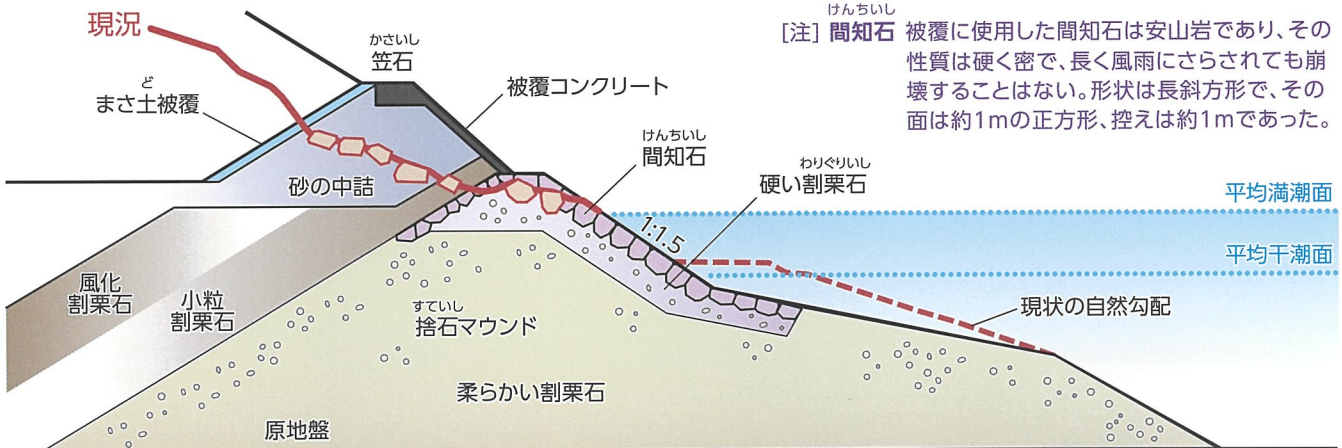


図6：第二海堡護岸部の標準的な断面図

[資料]「富津市富津第二海堡跡調査報告書」図-3.1.1より作成

第二海堡の工事工程表

工期		1880	1890	1900	1910	
施工期間			1889第二海堡着工	1899人工島竣工	1914第二海堡竣工	
人工島	投石試験工事		1889柔らかい割栗石の投入			
	基礎地盤	割栗石	1890柔らかい割栗石の投入			
	外周護岸	石積		・間知石は、器械潜水夫によって硬い割栗石を厚さ約50cmに敷き均し、その上に勾配(1:1.5)で積み重ねた		
		被覆コンクリート		・埋立地外面にコンクリート打設し、上部に笠石を置く		
埋立		・満潮面以上は厚さ20cmの層ごとに散水締めを実施 ・捨石マウンドの内側には、砂留めのため小粒割栗石や風化割栗石を投入				
上部構造	砲台・備砲			1900~1907砲台工事	1905~1913備砲工事	
	その他の上部工			1900倉庫、煉瓦造等建築物設置	探照燈設置	
撤去	撤去工					

第二海堡の砲台・備砲の特徴

第二海堡の砲台などの上部構造物・建物の壁体は、脚壁・奥壁を煉瓦造りとし、最も重要な施設である15cm加農砲および27cm加農砲の砲床・天井部などの強靱部をコンクリート造りとしていました。

一言で砲台といっても、砲台が戦闘機能を発揮するためには各種の施設が必要です。例えば火砲を据え付けた砲座・砲床、弾薬庫、観測所、電灯所（発電室と探照灯照明所）、居住施設などがあります。

特に砲塔砲の場合は、最上部の射撃室以外の、砲を動かす手動力機関室、砲側弾薬庫、給弾室などのすべてが地下構造であり、その工事は大変であったことを想像することができます。

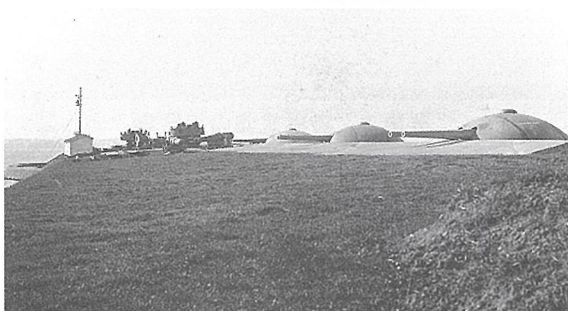
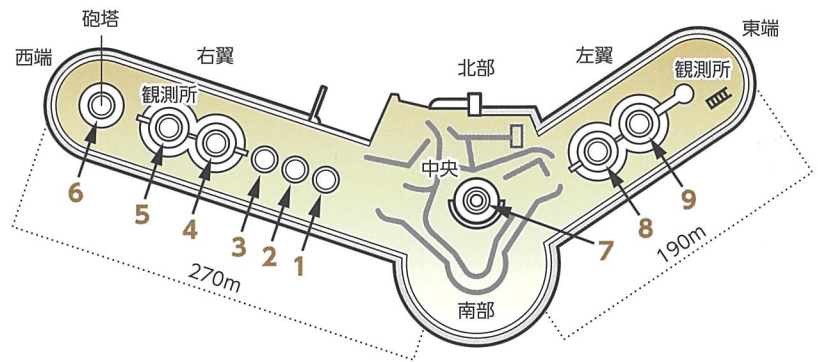


写真3：第二海堡右翼砲塔配備之景
[資料] 海堡撮影帖(東京湾) 陸軍兵器本廠／宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵より転載
明治39年(1906)10.7 撮影



1・2・3・6：15cm加農砲(砲塔) 6：探照灯(関東大震災後に設置)
4・5・8・9：27cm加農砲(隠頭) 7：27cm加農砲(中央部砲塔)
[注]この他、移動式の7.5cm加農砲(速射)が配備されていた記録がある。

図7：第二海堡の完成配備図

[資料]「富津市富津第二海堡跡調査報告書」図-2.3.1より作成

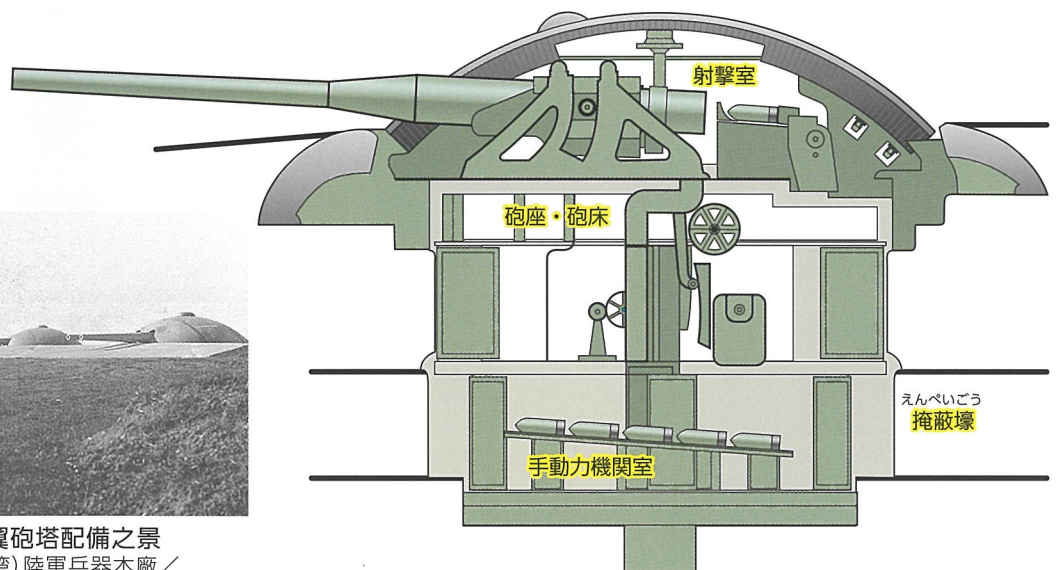


図8：第二海堡の27cm加農砲断面図

[資料]「富津市富津第二海堡跡調査報告書」図-2.3.6より作成

[注] 参考文献：日本帝国海堡建築之方法及景況説明書(米国公文書館蔵)明治39年(1906)、大日本帝国陸軍築城本部「現代本邦築城史、第二部、第二海堡基礎試築成績表」明治24年(1891)、国土交通省関東地方整備局「東京湾第三海堡建設史」平成17年(2005)・「富津市富津第二海堡跡調査報告書」平成26年(2014)

1920	1930	1940	1950	備考
<p>関東大震災</p> <p>1924加農砲応急設置</p> <p>1924隠頭砲・砲塔撤去</p>	<p>1931水中聴音訓練所設置</p> <p>1933中央部砲塔撤去</p>	<p>太平洋戦争勃発</p> <p>1942高角砲設置</p>	<p>1945連合軍による破壊</p>	<p>東京湾海堡設計画の技術面で活躍したのが西田明則です。西田はイギリス・ロシア等欧州の海堡に関する文献を集め、これらを参考に海堡を設計するなど、最大の功労者といわれています。</p>

受け継がれる遺構と変わりゆく第二海堡

第二海堡の煉瓦構造物の特徴

第二海堡は、太平洋戦争後の爆破破壊により、兵舎や掩蔽壕などの煉瓦構造物および砲台などのコンクリート構造物も完成時の原型を留めているものは見あたりません。しかしながら、一部の煉瓦壁体は残存しており、積み方や寸法などを確認することができます。その特徴は煉瓦の積み方がイギリス積みであることと、気象の影響を受けやすい外壁部分に吸水率が低い「焼き過ぎ煉瓦」が使用されていることです。

また、「明治工業史化学工業篇」は次のように記し、東京湾海堡に小菅の煉瓦製造所製煉瓦が多量に使用されたことを示唆しています。

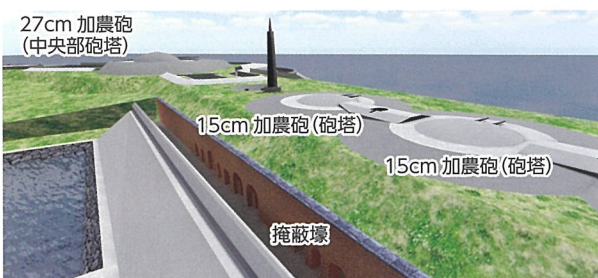


図9：当時を再現した掩蔽壕外観 (CGによる再現図)

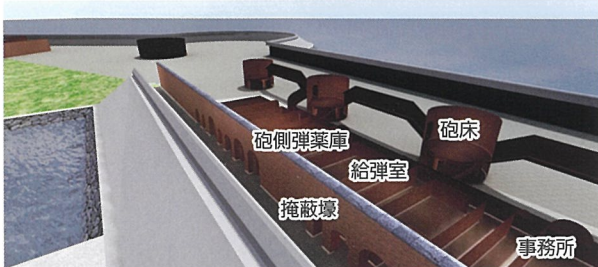


図10：掩蔽壕の地下構造イメージ (CGによる再現図)

「小菅の煉瓦製造所は、明治十五年皇居御造営の御用となり、且、陸軍省の砲台建築用として其の大部分を買上げられたらしい」とし、これにより、この時期において陸軍が調達した煉瓦は全て小菅の煉瓦製造所製の煉瓦であることが推定されています。

第二海堡からは建築用普通煉瓦 (赤煉瓦)、桜花章の刻印が押捺された14種類 (短弁10、復弁4) の刻印付き煉瓦が採集されています。

[注] 当時、小菅の煉瓦製造所では、関東大震災で諸施設が大打撃を受けるまで、小菅集治監こすげしゅうちかんの囚人労働の一環として煉瓦製造が行われていた。小菅集治監は現在の東京都葛飾区小菅の東京拘置所である。



写真4：右翼北側の掩蔽壕
令和2年(2020)3月18日撮影

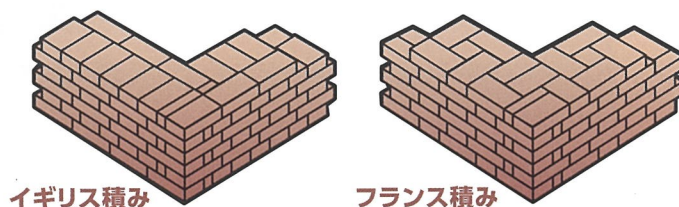


図11：イギリス積みとフランス積み

煉瓦の刻印

第二海堡からは桜花章煉瓦の他にいくつかの刻印が収集されています。「小丸に文字のす」、「小丸に文字のゆ」、「小丸に文字の大小」、「小丸に算木」、「英文字SR」などです。



【単弁桜花章a種】



【単弁桜花章b種】



【複弁桜花章a種】



【複弁桜花章b種】



【単弁桜花章a種の煉瓦】



【小丸に「す」】



【小丸に「ゆ」】



【小丸に「大小」】



【小丸に「算木」】



【英文字「SR」】

写真5：第二海堡における煉瓦の刻印

[資料]「富津市富津第二海堡跡調査報告書」写真-3.7.6より転載

関東大震災による被害

第二海堡上部構造竣工の9年後の大正12年(1923)9月1日、関東大震災が発生し、3カ所の東京湾海堡は大きな被害を受けました。砲台などの主要部は残っていたものの、海堡が修復されなかったのは、火炮の性能が向上し、射程距離が伸びたため、海堡の必要性が薄れたことによるとされています。

そして、第二海堡においては、崩壊が進み、壁体構造物のドームや壁に縦横の亀裂が生じ、掩蔽部は前方に傾いてしまいました。

敗戦後の連合軍による破壊

昭和20年(1945)8月14日、鈴木貫太郎内閣はポツダム宣言を受諾し、終戦を迎えました。そして連合国最高司令長官の要求事項が手交され、そのなかに東京湾地域の一切の海岸砲・高射砲その他の砲はその口径の如何を問わず尾栓(閉鎖機)を除去し、その砲身を最低俯角に下げ使用不能にすることが要求されました。実際には英国の部隊が第二海堡を占領しましたが、どの程度に砲および砲台が破壊されたかは分かっていません。

波浪と経年劣化による崩壊

第二海堡は東京湾口に位置し、潮流と風や波にさらされ、外周護岸部は大きく崩壊しました。また、護岸の崩壊・損傷による砲台基礎部への浸水、築島土砂の流出が生じるなど、第二海堡の全域にわたり、劣化や損傷、崩壊が確認されています。

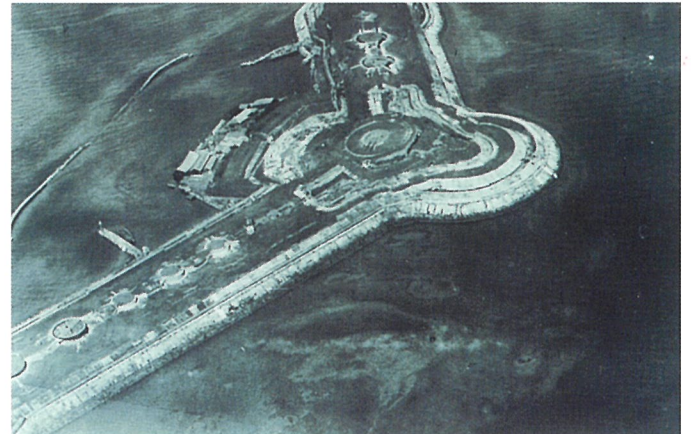


写真6：関東大震災直後に撮影された第二海堡
[資料]防衛研究所蔵、大正12年(1923)9月9日、日本海軍撮影



写真7：終戦後に撮影された連合軍艦隊と第二海堡
[資料]米国立公文書館(NARA)所蔵、昭和20年(1945)9月2日撮影
『新横須賀市史 別編軍事』より転載



写真8：護岸整備工事着工前
平成16年(2004)3月撮影

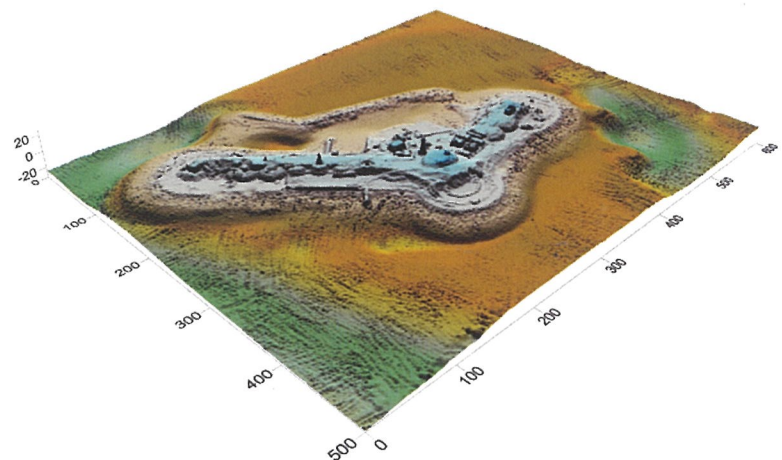


図12：第二海堡のレーザー測量による鳥瞰図
[資料]「富津市富津第二海堡跡調査報告書」図-3.1.2より転載

第二海堡の現在

第二海堡の護岸保全

首都直下地震や東海・東南海・南海地震などの大規模地震により、地盤が液状化し、護岸部が崩れて土砂が航路内に流出することが予測されたことから、航路機能を維持するための「予防保全」として第二海堡の護岸整備工事を行っています。

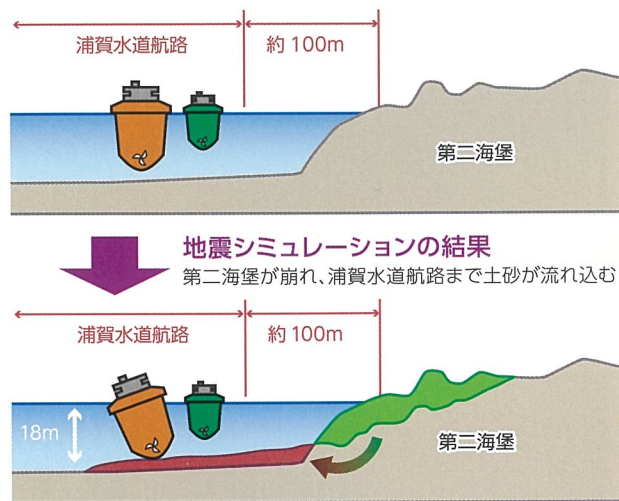


図 13：地震による航路への土砂流出

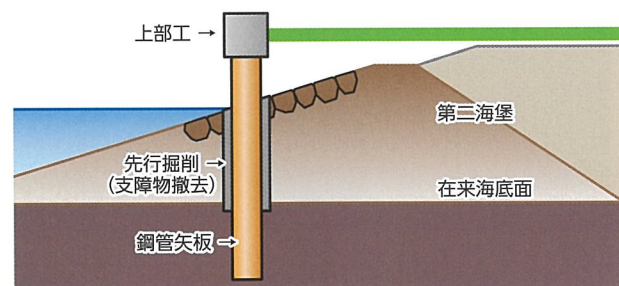


図 14：自立式鋼管矢板構造



写真 9：現在の第二海堡の護岸
令和元年(2019)9月19日撮影

開発保全航路の安全管理

東京湾は、首都圏の経済・社会活動を支える重要な海域です。湾内には船の通り道である東京湾中央航路があり、各港へ出入りするコンテナ船やタンカー等の大型船をはじめ、漁船や小型船も通る海上交通の要衝となっています。

国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所では開発保全航路の機能維持を目的とした航路管理パトロール、航路管理測量、航路情報管理を実施し、日々航路の安全確保に取り組んでいます。

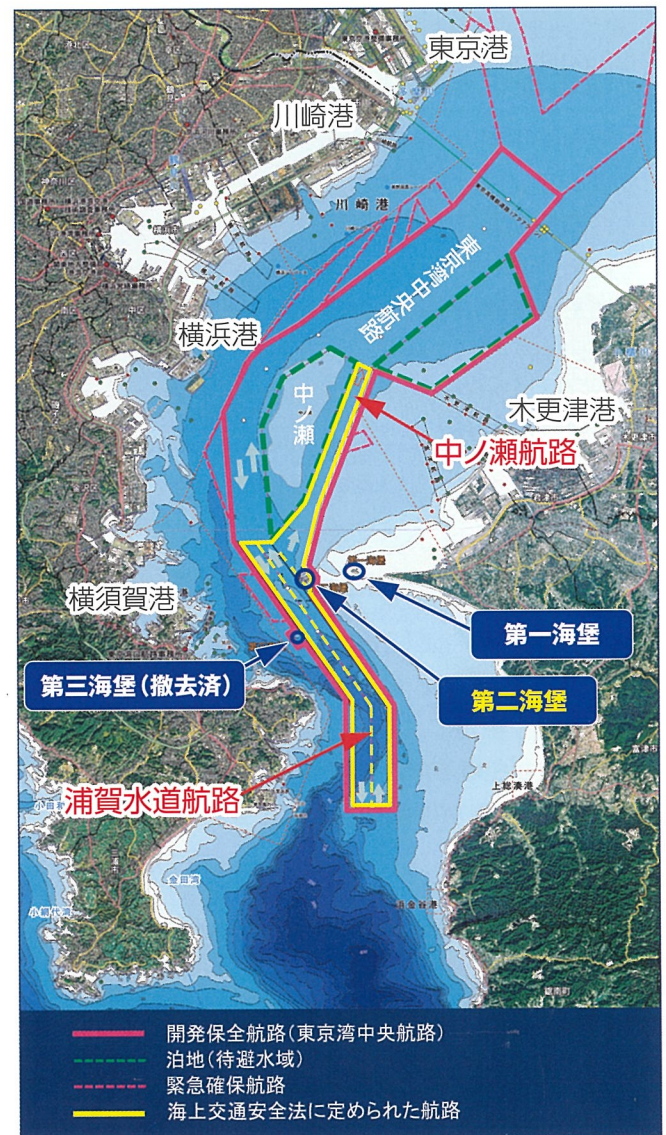


図 15：現在の東京湾中央航路

発行：国土交通省 関東地方整備局 東京湾口航路事務所

〒238-0005 神奈川県横須賀市新港町13番地
TEL : 046(828)8366 / FAX:046(828)8367
Web : <https://daini-kaiho.jp/kaiho/>


東京湾海堡ツーリズム機構
<https://daini-kaiho.jp/>
上陸ツアー実施中